

犬のしつけ ～無駄吠え～

帰宅した飼い主に向かって犬が飛びつくのは、うれしくて興奮している表現です。散歩途中に出会った人や来客に喜んで飛びつくのも、「あなたのことが大好き。一緒に遊ぼうよ。」という気持ちの表れだと考えられています。しかし、犬の飛びつきによって、服を汚してしまったり、犬嫌いの人を驚かせてしまうこともあります。また、大型犬だと、思わぬケガや事故につながることもあります。トラブルを避けるためにも、飛びつかないようにしつけをする必要があります。

※歓迎を示す飛びつきのほかに、マウンティング行動として、飛びつく犬がいます。これは、支配性の強い犬（とくにオス）が、人に飛びついて、自分の優位性を示そうとする行動です。

飛びつきをやめさせる方法

飛びつくたびに叱られたり、体を押しつけられたりすることで、逆に遊んでもらえたと思って、飛びつきを強化していることもあります。犬が前足をあげて飛びついてきた時に、厳しく『ノー』と言いながら、強くはねのけましょう。犬の飛びつきをやめさせるためには、家に来た日から、絶対に飛びつきを断ち切る努力をすることが大切です。

飼い主と目が合うと飛びつく犬の場合

- *話しかけたり、視線を合わせたりせず、背中を向けて無視します。近くに壁があれば、そちらを向き無視続けます。
 - *犬が落ち着くまで、しばらくかまわないようにします。飛びつくのをやめて落ち着いたら、おすわりをさせてほめてあげます。
- 飛びつかなくても、飼い主がかまってくれることを教えましょう。

帰宅時に飛びつく犬の場合

- *帰ってきた時に、犬が飛びついていても声をかけず、無視します。
- *荷物をしまったり、着替えたり、必要な用事をすべてすませます。
- *犬が落ち着いてから「ただいま」と声をかけ、ほめてあげます。



犬のしつけ ～無駄吠え～



吠えることは本能であり喜びである

無駄吠えというのは、あくまでも人間のとらえ方であって、犬からすると無駄吠えというものには存在しません。吠える行動には、必ず理由があります。

犬が吠えることは本能なので、100%やめさせることは不可能です。問題行動としての定義は、それを受ける人間側の問題となります。

無駄吠えをやめさせる方法

犬が吠えた瞬間に力強く『ノー』と言う、または何かで大きな音を立てて、吠えるのをやめさせます。吠えるのをやめなければ全く意味がないので、吠えるのをやめるまで続けましょう。吠えるのをやめたら、ほめてあげましょう。

また、無駄吠えをやめさせるためには、犬がなぜ吠えているのか、理由を探ることも大切です。原因を除去することや、慣れさせたり、環境を整えることで無駄吠えの予防にもつながります。

状況別解決法は裏面参照

例 1. 飼い主の関心をかうために吠える

無視しましょう。吠えるのをやめ、おとなしくなった時に声をかけ、遊んであげます。

例 3. 客や玄関チャイムに吠える

チャイムが鳴ったら、『おすわり』『ふせ』などの号令をかけ、できたらほめてあげましょう。また、家族もチャイムを押して入るなど、チャイムが鳴ったら知らない人が来ると思わせないようにしましょう。

例 5. 散歩を要求して吠える

散歩の時間を決めないようにしましょう。散歩の準備をしても、散歩には行かないという行動を繰り返します。吠えたら散歩に行かないというのも効果的です。

例 7. サイレンの音に反応する

サイレンの音を録音し、食事中や遊んでいる時に、小さな音量で音を流します。犬が気にならないようになったら、少しずつ音量を大きくしていきます。

例 2. 来客時に玄関に突進して吠える

フェンスなどで、玄関にでられないようにしましょう。

例 4. 通行人、犬に吠える

見えないように工夫しましょう。
くもりガラス、カーテン、塀などで外が見えないようにしたり、犬を外が見えない部屋に移動しましょう。



例 6. ヒマで吠える

散歩や運動、遊ぶ時間を多くして、欲求不満を解消させましょう。また、ひとり遊びができるおもちゃを与えたり、運動できるスペースをつくってあげましょう。

犬のしつけ ～甘咬み～



子犬の頃の甘咬みを徹底してやめさせましょう

犬の問題行動のなかで、重要視されるものが人に対する攻撃、咬みつくとという行為です。咬むことをやめさせるには、子犬の頃の甘咬みを放置しないことが大切です。「子犬だし、それほど痛くないから」と放っておくと、成犬になっても口を使って遊んでしまいます。

また、咬みぐせのある成犬は、すでに「咬んだ方が自分にとって状況が好転する」ということを学習しています。成犬の咬みぐせを直すのはとても難しいことなので、子犬の時から、徹底して甘咬みをさせないようにしていきましょう。

甘咬みをする理由

乳歯が生えそろう時期(生後3週間頃～2ヶ月頃)や、永久歯へ生え変わりの時期(生後3ヶ月頃～6ヶ月頃)は、子犬はアゴの気持ち悪さで落ち着きをなくしたり、イライラしたりします。その影響で、これらの時期は甘咬みをしたり、周囲のものをかじる行動が起こります。

また、子犬同士は咬み合って遊びます。犬同士咬んで遊ぶことによって、咬む加減を学びます。

子犬の甘咬みへの対処法

1. 子犬が咬んできたら「痛い」と言い、手を引っ込め(手を組み)、無視します(視線を与えない)。座っている場合は立ち上がります。
2. 子犬が諦めたら、元に戻ります。また咬んできたら1を繰り返します。

※足元などを咬んできて、無視しきれない場合(どうしても反応してしまう、動いてしまうなど)は、「痛い」と言って、1～2分部屋を出ます。再び咬んできたら同じことを繰り返します。

子犬に甘咬みをさせないための注意点

◆咬んでもいいおもちゃを与える



◆手で直接遊ばない

手で遊ぶ(遊んでいる時に咬ませている)など、犬が「手を咬むことが良いことなのか、悪いことなのか分からない」状態をつくらないようにしましょう。

◆遊びの途中、犬が興奮してきたら、いったん遊ぶのをやめる

興奮すると咬む衝動が強くなります。子犬が興奮してきたら、いったん遊びを中断し、落ち着いたら遊びを再開するなどして、「興奮しても飼い主は喜ばない」ことを犬に教えましょう。